

嘉手納基地の沿革

本町に所在する米軍基地は、嘉手納飛行場、嘉手納弾薬庫地区及び陸軍貯油施設がある。

嘉手納飛行場の面積は19.86平方キロメートル(東京国際(羽田)空港の約1.3倍・東京ドームの約425倍)で嘉手納町、沖縄市及び北谷町の1市2町にまたがっている。

嘉手納飛行場は、昭和19年9月に旧日本陸軍航空本部中飛行場として開設されたが、昭和20年4月、沖縄本島に上陸した米軍は直ちに同飛行場を占領し、整備拡張を行い、同年6月には大型爆撃機が離発着できる全長2,250メートルの滑走路を完成させ、昭和42年5月頃には4,000メートル級の2本の滑走路を完成させた。

昭和43年2月5日には台風避難を理由に飛来したB-52部隊が常駐し、同年11月19日、B-52戦略爆撃機が離陸に失敗し、墜落爆発炎上した。この事故を契機にB-52部隊常駐に対する住民の反対運動が高まり、昭和45年10月6日をもってB-52部隊は撤去された。

昭和47年5月15日の復帰の際には、「嘉手納飛行場」、「キャンプサンソネ」、「陸軍住宅地区」が統合され、「嘉手納飛行場」として提供され、昭和54年以来始まった一連の太平洋空軍の装備の近代化の一環として昭和54年9月29日からF-15イーグル戦闘機の配備が開始され、昭和56年3月27日に配備が完了し、F-4DファントムからF-15イーグル戦闘機3飛行隊へ改編を終了、また、昭和55年5月23日にE-3A(現E-3B)セントリー空中早期警戒管制機が配備された。嘉手納基地再編統合により平成4年12月15日をもって、F-15イーグル戦闘機18機が撤退した。

ピナツボ火山の噴火に伴い、平成3年6月にフィリピンクラーク基地から一時移駐していた第353特殊作戦群が、第18航空団準構成部隊として常駐するようになった。

そのほか、第18航空団準構成部隊として、第733空輸機動支援中隊、第82偵察中隊や第390情報中隊が配備されているほか、在沖米海軍艦隊活動司令部が置かれ、P-3Cオライオン対潜哨戒機、P-8Aポセイドン対潜哨戒機及びEP-3電子偵察機等が配備されている。

嘉手納飛行場と連動する嘉手納弾薬庫地区は、面積が26.58平方キロメートルで、嘉手納町、沖縄市、うるま市、読谷村、恩納村の2市1町2村の広範囲にまたがっている。同弾薬庫地区は、昭和20年米軍の沖縄占領と同時に使用され、従来陸軍が管理していたが、在沖米陸軍の機構の再編成に伴い、昭和53年7月頃に陸軍の弾薬庫が韓国や中近東に移設されたため、同年10月1日から第18航空団第18整備群第18弾薬中隊が管理運営し、陸軍、海軍、空軍、海兵隊、四軍全部の任務を支援している。

海軍は、南部弾薬庫や那覇空軍・海軍補助施設の瀬長島にあった海軍弾薬庫の返還に伴い、昭和51年8月31日に移設されたもので、空軍地域の一部を使用し、対潜哨戒機の魚雷弾頭や爆雷を貯蔵している。

また、陸軍貯油施設として嘉手納タンクファームがある。米軍は昭和20年から27年にかけて、嘉手納町、北谷町、那覇市、具志川市(現うるま市)にタンクファームを建設し、昭和27年から28年にかけて、これらの施設間のパイプラインを敷設して連結し、米軍の主要基地間を結ぶ動脈としてジェット燃料やガソリンなどを送油している。



旧日本陸軍中飛行場



B-52墜落事故